第Ⅰ部
基本構想







未来を拓く力の育成（附属学校園共通主題）

研究主題

持続可能な社会の実現に貢献する実践者の育成
－既有の知識や経験がつながる「深い学び」の創造を通して－

（３か年研究最終年次）

１　本附属学校園における研究の方向性

愛媛大学は，大学憲章において「豊かな創造性，人間性，社会性を備え，次代を担う自覚と誇りをもつ優れた人材を社会に送り出すことを最大の使命とする。」と謳っている。この使命を果たすべく，附属５校園では，「未来を拓く力の育成」を共通主題として掲げ研究実践を進めている。中学校では，各学校園の特性及び学校園間の系統性や連続性を踏まえて，教育目標と望ましい子ども像を以下のように設定し研究を進めている。

【教育目標】　自立と共生の力をもつ生徒の育成

【望ましい子ども像】
○真理を求める探究心をもって物事を多面的・多角的に考察し，その学びを楽しもうとする
○自信と誇りをもって，可能性に挑戦し続けようとする
○豊かな感性や表現力と他者を尊重する心をもち，積極的に自己を拓いて他者に働き掛けようとする

２　研究主題について

(1)　「自立と共生の力」と「持続可能な社会の形成に向け，主体的に行動できる資質・能力」

地球環境問題，紛争の問題，貧困や人権問題，排他主義など，近年，社会の持続可能性に関わる問題が深刻化している。このような中，2005年から持続可能な開発のための教育の取組（ESD）が世界中でスタートし，2015年には，国連で開かれたサミットにおいて，「SDGs（持続可能な開発目標）」が定められるなど，持続可能な社会づくりへの取組はますます進んでいる。

学習指導要領においても，持続可能な社会づくりの重要性が次のとおり示されている。

> 教育は，教育基本法第１条に定めるとおり，人格の完成を目指し，平和で民主的な国家及び社会の形成者として必要な資質を備えた心身ともに健康な国民の育成を期すという目的のもと，同法第２条に掲げる次の目標を達成するよう行われなければならない。－中略－これからの学校には，こうした教育の目的及び目標の達成を目指しつつ，一人一人の生徒が，自分のよさや可能性を認識するとともに，あらゆる他者を価値のある存在として尊重し，多様な人々と協働しながら様々な社会的変化を乗り越え，豊かな人生を切り拓き，持続可能な社会の創り手となることができるようにすることが求められる。このために必要な教育の在り方を具体化するのが，各学校において教育の内容等を組織的かつ計画的に組み立てた教育課程である。　（新学習指導要領 前文　P17）

これからの子どもは，将来の変化を予測することが困難な時代を生き抜いていくとともに，よりよい社会を創るために，現在自分たちが置かれている状況に柔軟に対応しながら，様々な問題を解決していくことが求められている。

このような状況において，附属５校園全体の共通主題にある「未来を拓く力」を，附属中学校では，「持続可能な社会の形成に向け，主体的に行動できる資質・能力」と捉え研究を進めてきた。そして，教育目標「自立と共生の力をもつ生徒の育成」を具現化するため，**自立**及び**共生**の力に照らした，持続可能な社会を形成するための資質・能力を次のように捉えた。

「自立」の力
○物事を多様な観点から捉え，問題の本質を見抜く力
○広い視野で物事を客観的に判断する力
○よりよい社会や自分の姿を思い描く力
○実現に向け粘り強くチャレンジし続ける力
○問題の解決にむけ，自ら考え，見通しをもって行動する力
○解決の過程や結果を振り返って修正・改善する力
○自分の気持ちや考えを表現し，伝える力
「共生」の力
○多様な価値観を認める力
○互いの個性を尊重する力
○社会の形成者としての自覚をもち他と協調しながら自ら進んで行動する力
○現在，そして将来にわたり社会的・経済的に公正な社会を築こうとする力

(2) これまでの研究と成果・課題

前研究サイクルでは，次の研究主題及び研究内容から教育目標の具現化に迫った。

研究主題
持続可能な社会を支える資質・能力の育成ー論理的に思考し表現する学び合いを通してー
研究内容
(1) 逆向き設計論に基づく学習指導の充実
(2) 言語技術教育を取り入れた学習活動の展開
(3) 資質・能力が育つ評価（パフォーマンス評価等）の工夫

その成果として，生徒は話すことに自信を持って取り組み，筋道立てて自分の考えを表現したり，相手の考えを聞き取ることができるようになり，疑問を持って問題解決しようとしたり，学びを楽しもうとするようになった。教科の本質に迫る授業設計やその評価を工夫することと，言語技術教育を通した論理的に思考し表現する学び合いの効果が相まって，身に付けさせたい資質・能力が高まる「深い学び」につながったといえる。さらに，生徒自身が，目指す理想の学校の姿を「一人一人が自主的・主体的に考え，行動し，自分たちで創り上げる学校」であると掲げ，生徒会活動の充実を呼びかける姿も見られてきた。

しかし，各教科での学びを生かして他の場面（行事などの学校生活や日常生活）で実践することについては，次のような課題が見えた。

①生徒は与えられた問題をよりよく解くことはできるが，**自ら課題を見いだす**ことはまだ十分でないところがあること
②一つ一つの課題を自分ごととして捉え，各教科での学びをもとによりよい学校生活や社会づくりを目指して更に実践の場で活用していくという**主体性**の育ちが十分でないこと
③教科等における学びが，自分たちの集団の中でしか発揮されず，学校外における**多様な他者との関わり**の中では十分に発揮されなかったこと

3 研究推進について

(1) 「持続可能な社会の実現に貢献する実践者」について

これらの成果や課題から見えた，次に目指す段階は**「持続可能な社会の実現に貢献する実践者」**であると考えた。

「実現に貢献する実践者」について

一つ一つの課題を自分ごととして捉え，明確な目標を設定し，課題解決や目標達成のために既有の知識や経験を基に思考力・判断力・表現力を発揮して，よりよい解決方法を考えること，そして，その解決や解決を通して目指すよりよい社会の実現のために，今も，これからも責任と自覚を持って行動に移していく生徒の姿である。

このような生徒の姿を具体的に示し，その姿に迫る研究を進めることで，これからの時代に求められる学びの形を創り出し，その学びを通して，子どもたちを持続可能な社会の実現に貢献する実践者としてよりよく育てることができるのではないかと考え，研究主題を**「持続可能な社会の実現に貢献する実践者の育成」**，それに迫る方策としての副主題を**「既有の知識や経験でつながる『深い学び』の創造を通して」**と設定し，３年間での研究を進めることにした。

⑵　「既有の知識や経験でつながる『深い学び』の創造を通して」について

生徒が授業の学びを通して，持続可能な社会の実現に貢献する実践者の姿に迫っていくためには，次の２点に留意して研究を進めることが重要であると考える。

１点目は，各教科における「持続可能な社会の実現に貢献する実践者の姿」を明確にして，持続可能な社会やその実践者の姿を志向した学びを進めていくことである。２点目は，その学びの中で，生徒が既有の知識や経験を基に思考力・判断力・表現力を発揮して，よりよい解決方法を考える手立てを工夫することである。

各教科においては，それぞれの教科の目標や特性，見方・考え方があり，主題に掲げる生徒の姿に迫る方法が異なる。そこで，各教科等において，主題を具現化するにあたって，教科における中学校卒業段階の「持続可能な社会の実現に貢献する実践者」の姿を，先述の自立と共生の力を手がかりに設定した。そして，教科の研究テーマとなる学習指導の目標を設定し，持続可能な社会やその実践者の姿を志向した学びを進めていくことをねらった。

【各教科における中学校卒業段階の「持続可能な社会の実現に貢献する姿」と学習指導の目標】

教　科	上段：持続可能な社会の実現に貢献する姿　　下段：学習指導の目標
国　語	「思考」「認識」「コミュニケーション」の根幹をなす言葉の力を理解し，主体的に活用する生徒 言葉による深い学びを共に創りあげる学習活動の展開
社　会	社会や世界に向き合い関わり合い，当事者意識を持って課題を主体的に追究・解決しようとする生徒 よりよい社会や自分の姿を思い描く力の育成
数　学	数学的な見方・考え方を働かせて問題発見・解決する過程を主体的に遂行し，それらを振り返って修正・改善する生徒 数学的な見方・考え方を働かせて問題発見・解決する生徒が育つ授業の展開
理　科	自然や人と主体的に関わり，理科の見方・考え方を働かせながら，科学的根拠に基づいて探究することのできる生徒 科学的根拠に基づき，探究する資質・能力の育成
音　楽	一人一人が自分自身の力で多様な音楽を楽しむことのできる生徒 音楽的な見方・考え方を働かせ，学びの深まりが実感できる指導法の工夫 ～指導内容の連続性を考えたカリキュラムの構築を通して（小中連携）～

教　科	上段：持続可能な社会の実現に貢献する姿　　下段：学習指導の目標
美　術	自己の考えや価値観を見つけ出し，深め，高めながらそれらを主体的に表現しようとする生徒 美術科における，自らの気持ちや考えを表現し，伝える力の育成
保健体育	運動やスポーツの楽しさや喜びを実感し，前向きに運動や健康の保持増進に取り組もうとする生徒 豊かなスポーツライフの実現に向かう実践者の育成
技　術 ・ 家　庭	〔技術〕生活や社会で使われている技術に関心を持ち，生活の中の問題を見出し，課題を設定し，その解決に向け，習得した知識や技能を実際の生活の中で生かそうとすることができる生徒 〔家庭〕家庭や社会に関心を持ち，生活の中の様々な問題を見出し，課題を設定し，その解決に向け，習得した知識や技能を実際の生活の中で生かそうとすることができる生徒 生活の中の課題を見付け，解決する力の育成 〔技術〕技術を活用する力を育てる学習指導の工夫 〔家庭〕習得した知識や技能を生活に生かす力を育てる学習指導の工夫
英　語	社会や世界，他者と関わる中で，自分の気持ちや考えを主体的に表現し，伝え合うことのできる生徒 社会や世界，他者と関わる中で，自分の気持ちや考えを主体的に表現し，伝える力を身に付けさせる授業展開

また，一つ一つの課題を自分ごととして捉え，明確な目標を設定することや，課題解決や目標達成のためによりよい解決方法を考えること，そして，その解決や解決を通して目指すよりよい社会の実現のために責任と自覚を持って行動に移していくことについては，主に三つの対象，「題材」「他者」「自分自身」とつながることによって達成されていくと考える。（田村学　2018，愛媛大学教育学部附属中学校研究紀要）

その際，それぞれの対象とつながるための既有の知識や経験（生活経験や積み重ねた知識等）は，個々の生徒の生活，環境によって異なる。そこから，どのように新しい知識や経験を獲得する学びにしていくかを以下に示す。

①「既有の知識や経験でつながる」について

既有の知識や経験を活用する学習を通して，学習者は

○題材と出合う　　（題材とつながる）

○他者との対話等を通して新しい考えを獲得する　　（他者とつながる）

○自分自身を振り返って新たな見方・考え方に気付く（自分自身とつながる）

ことにより，新しい知識や経験を獲得する。また，既有の知識や経験を活用したり他者と共有したりすることで，学びが更に深まり，以降の学習や生活に生きて働くものになると考える。この状態を，**既有の知識や経験で（題材・他者・自分自身と）つながる**ことと捉える。

②「深い学びの創造」について

①によって実現される学びは生徒が意欲的に創り出していくものである。そこから身に付くであろう知識や経験をもとによりよい社会の実現を目指す態度は，実践者としての姿そのものであると考える。このような学びを，**「深い学び」**であると捉える。

このような方策で主題に迫ることにより，各教科の研究を通して育つ生徒の姿が学校全体で育

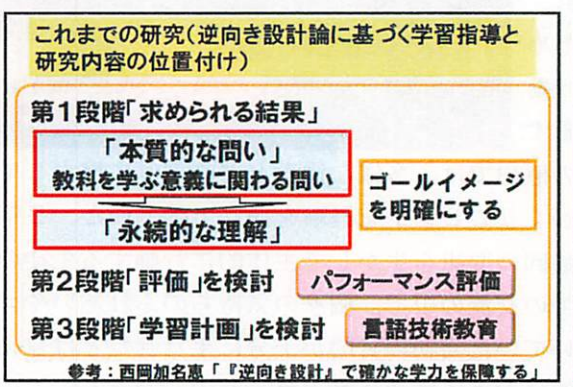
てたい生徒の姿に統合され，よりよい実践者としての姿が見えてくると考える。
その上で，次の３点から主題や副手題の具現化に迫った。

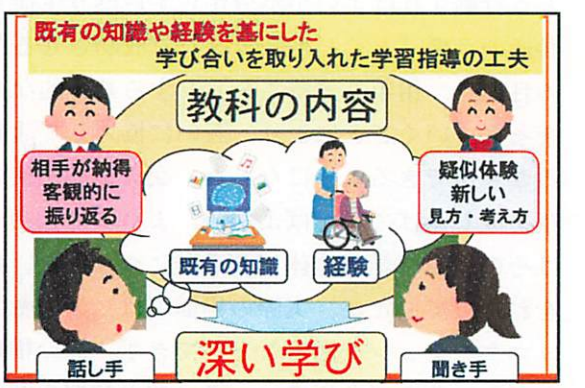
4　研究内容

(1)　既有の知識や経験を基にした学び合いを取り入れた学習指導の工夫
(2)　教科の学びをつなぐ学習
(3)　実践や価値の実感につなげる評価（パフォーマンス評価・OPPA等）の工夫

(1)　既有の知識や経験を基にした学び合いを取り入れた学習指導の工夫

これまでの研究では，言語技術教育を取り入れた論理的に思考し表現する学び合い，そして逆向き設計（西岡加名恵　2008）による，「本質的な問い」と「永続的な理解」からなるゴールイメージを明確にして教科の本質に迫る学習指導により，「確かで豊かな学び」の実現につなげることができた。今回は，これまでの取組の上に立ち，**既有の知識や経験を教科の内容と結び付けて話し合う**ことにより，自己の経験を相手に伝えることで客観的に自己を振り返ってよりよい行動につなげたり，相手の経験をよく聞くことにより疑似体験し，新しい見方や考え方を知ることで，自分の判断や行動に生かしたりすることができるであろうと考えた。そして，このような各々の経験を基にした話合いを通して，互いが経験を共有しながらよりよい解決に迫ることができ，実践者として必要な資質･能力を育成する深い学びの実現につながるであろうと考えた。そのためにはどのような指導の工夫を図ることがよいか，有効な手立てを探った。





資料１　これまでの研究と既有の経験を基にした学び合いを取り入れた学習のイメージ

研究２年次までの取組では，単元や授業の課題について，生活経験を根拠にして題材を捉えることや，自分の考えを主張したり相手の意見を聞いたりするときにも，生活経験に着目することを意識させた。この取組を通して，生徒は題材と自分自身を深くつなげるとともに，自分自身についても深く考えることができた。さらに，他者からの評価や他者の考えを聞くことにより，多様な見方・考え方を知ることができた。学習後の自己評価では，このような学びを普段の生活に生かそうとする姿も見られた。その一方，生活経験のみに依存した根拠が授業のねらいや教科の本質から外れてしまうこともあり，身に付けさせたい資質・能力が十分に身に付かないこともあった。

今年度は，教科の内容における根拠を軸にして，教科の内容と既有の知識や経験が結びつく学習指導の工夫を行うことで，ねらいとする実践者として必要な資質･能力の育成に迫った。

(2)　教科の学びをつなぐ学習

教科の学びが，「持続可能な社会の実現に貢献する実践者」の育ちにまで高まるには，教科の中にとどまらない学びにしていくことが重要である。そこで，教科と教科で学びをつなぐことや，多様な他者と学びをつなぐことにより，生徒が教科での学びや自らの知識や経験を生かし

て題材，他者，自分自身とつながり，実践者としての在り方を見いだすことができると考えた。そして，各教科等における学びが行事や実生活の中で活用できたことを自覚し，その価値を見いださせる場面や学習を設定することで，以降の学習や生活においても主体的に取り組むことができるようにした。

① 他の教科に学びをつなぐこと

研究２年次までの取組として，環境問題を題材とした理科と社会の合同授業を実施したり，理科の「地震」の現象を数学の「関数」と捉え事象を予測する授業を行ったりした。どの取組においても，生徒の興味や関心を高める題材の選定・開発はもちろんのこと，現実のリアルな状況を設定し，生徒が課題意識を持って解決していく場面を設定すること，置かれている状況を自分ごととして捉え，持続可能な社会の在り方に迫ることで，その学びの効果が高まったと考える。

今年度も，他教科で扱う学びの対象を自分の教科に引き込むことで，対象について新たな視点を持ち，多面的・多角的に考察したり，対象の本質に迫ったりする学習や，教科の学びを他教科への学びの足がかりにすることで，教科で得た学びを活用していくようにした。

② 多様な他者と学びをつなぐこと



研究２年次までの取組例として，特別支援学校の中学部の生徒と年間を通した交流を行った。１年次は，学級単位での活動を行った。どのように相手と接すればよいか，活動を成功させるためにどう行動すればよいかが分からず戸惑う生徒も，共通の目標「とくしんピック」を成功させるための目標や，相手と気持ちを共有する具体的な行動を考えていくことにより，互いに協力して活動することができるようになった。交流後の生徒の感想では，多様な他者とどのように協力して物事を成し遂げていけばよいか，よりよい社会づくりのヒントを経験を通して得ていた。２年次はその取組を学年全体での活動につなげた。前回の取組を生かして主体的に行動する生徒の姿をねらっていたが，実際の場面では，大人数での交流の中で，個々の気持ちのふれあいやコミュニケーションを図ることができず，思い描いていた当初の目的が十分に果たせたとは言えなかった。そこで今年度は，総合的な学習の時間における探究活動のテーマの一つとしてこの活動を設定し，該当グループの生徒が前回までの課題を解決しつつ交流を進めることにした。

その他にも，オーストラリアのセント・アンドリューズ　ルースラン・カレッジとの交流として，手紙の交換から始まり，オンラインでの自国紹介や自己紹介，質問のやりとりなどを生徒会を中心として行っている。

しかしながら，一昨年度末よりコロナ禍で対面での活動が制限されており，その中でどのような方法や場面設定を行い交流していくか，可能な取組を進めている。

⑶ 実践や価値の実感につなげる評価（パフォーマンス評価・OPPA等）の工夫

パフォーマンス評価とは，リアルな状況の中で知識やスキルを使いこなすことを求めるような評価方法である（その事例は各研究の取組を参照）。これまでの研究において，持続可能な社会を意識したパフォーマンス評価等の工夫を行い，各単元におけるパフォーマンス評価においては様々な成果が見られた。今年度も，各教科等で研究主題を具現化する学習指導の目標に照らしたパフォーマンス評価を進めた。

なお，学習指導案の中には，全教科共通して，単元における①本質的な問い，②永続的な理

解，③ねらいとする資質・能力が使いこなせるものとして身に付いたかどうかを評価するパフォーマンス課題，④パフォーマンス課題を評価するための評価基準であるルーブリックを盛り込むことで，学校全体の研究の具現化を共通認識するとともに，各教科において育てたい実践者の姿に迫る構想・指導・評価の工夫を共有した。

２年Ｃ組　数学科　単元設計・学習指導案

指導者　冨永　剛志

１　時　間（場所）　６月１０日（水）12:55～13:40（２年Ｃ組教室）

２　単元設計（単元名:文字を用いた式）

(1) 本単元で育成したい自立と共生の力

○物事を多様な視点から捉え，問題の本質を見抜く力
○解決の過程や結果を振り返って修正・改善する力
○多様な価値観を認める力

(2) 単元目標

○文字を用いた式についての基礎的な概念や原理・法則などを理解するとともに，事象を数学化したり，数学的に解釈したり，数学的に表現・処理したりすることができる。
○文字を用いて数量の関係や法則などを考察することができる。
○文字を用いた式について，数学的活動の楽しさや数学のよさを実感して粘り強く考え，数学を生活や学習に生かそうとしたり，問題解決の過程を振り返って評価・改善しようとしたり，多様な考えを認め，よりよく問題解決しようとしたりする。

(3) 重点目標

＜本質的な問い＞

事象の中にある性質や関係を一般的に表したり，それらが成り立つことを説明したりするにはどうすればよいか。

＜永続的な理解＞

事象の中にある性質や関係を一般的に表したり，それらが成り立つことを説明したりするには，事象の中にある数量やその関係に着目して，それらを文字を用いた式で捉え，表現・処理したり，事象の性質や関係を考察し説明したりするとよい。

(4) 単元の評価規準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
○簡単な整式の加法と減法及び単項式の乗法と除法の計算をすることができる。 ○具体的な事象の中の数量の関係を，文字を用いて表したり，式の意味を読み取ったりすることができる。 ○文字を用いた式で数量及び数量の関係を捉え説明することを理解している。 ○目的に応じて簡単な式を変形することができる。	○具体的な数の計算や既に学習した計算の方法と関連付けて，整式の加法と減法及び単項式の乗法と除法の計算の方法を考察し表現することができる。 ○文字を用いた式を具体的な場面で活用することができる。	○文字を用いた式のよさを実感して粘り強く考え，文字を用いた式について学んだことを生活や学習に生かそうとしたり，文字を用いた式を活用した問題解決の過程を振り返って評価・改善しようとしたりしている。

その単元における，教科を学ぶ意義に関わる問い「本質的な問い」と，それを追究することによって得られる「永続的な理解」を示す。

(5) 評価の方法

パフォーマンス課題	その他の評価方法
あなたはある建物の工事現場にいる監督です。安全な工事を行うため，建物に近づかないよう，建物から１ｍ離れたところに規制線を作ろうと考えています。どのような建物でも通用する規制線の長さの計算方法を編み出してください。計算方法の説明には，自分で作った建物の例を用いて説明しなさい。	○ノート・ワークシート（ロイロを含む）への記述 ○課題追究状況の観察や声かけ ○単元別テスト

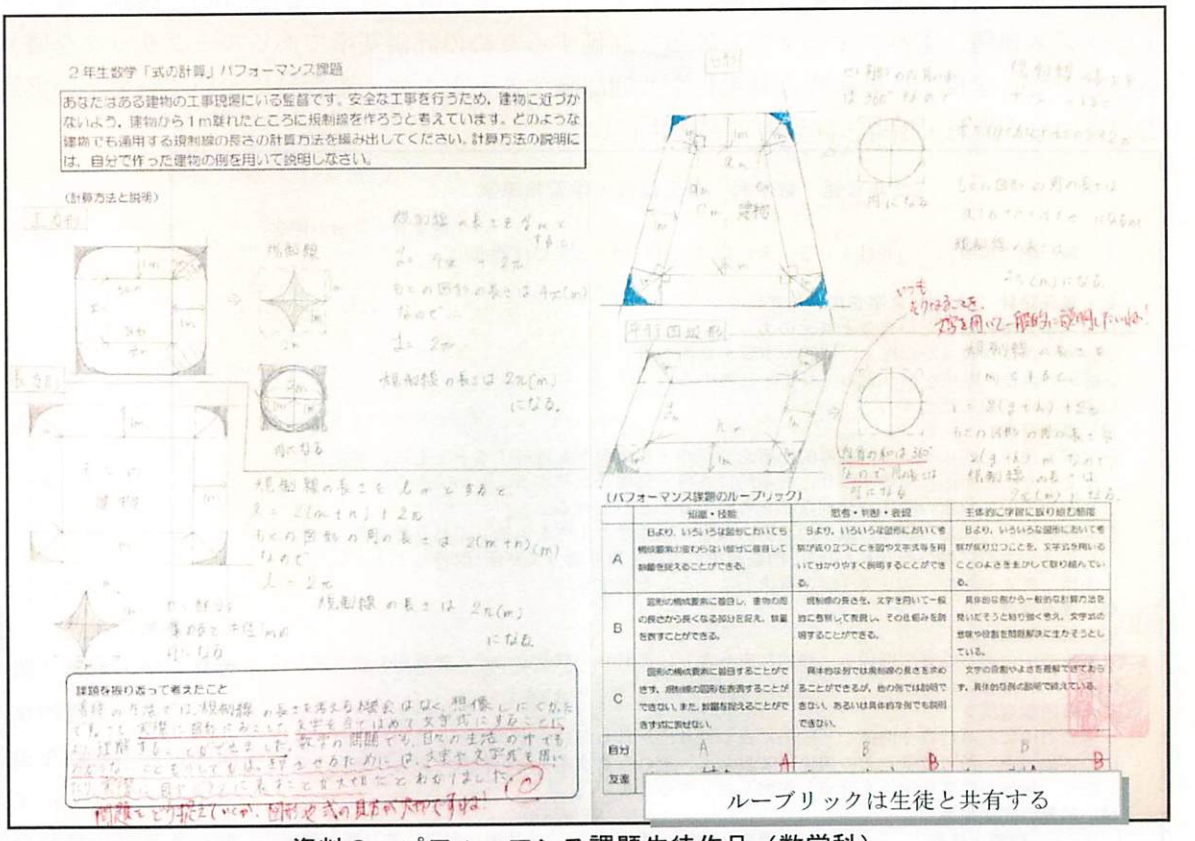
単元で身に付けさせたい資質・能力が生きて働くものとして身に付いたか，パフォーマンス課題で見取る。

［パフォーマンス課題の予備的ルーブリック］

	知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
A	Ｂに加え，いろいろな図形においても構成要素の変わらない部分に着目して数量を捉えることができる。	Ｂに加え，いろいろな図形において考察が成り立つことを図や文字式等を用いて分かりやすく説明することができる。	Ｂに加え，いろいろな図形において考察が成り立つことを，文字式を用いることのよさを生かして取り組んでいる。
B	図形の構成要素に着目し，建物の周の長さから長くなる部分を捉え，数量を表すことができる。	規制線の長さを，文字を用いて一般的に考察して表現し，その仕組みを説明することができる。	具体的な例から一般的な計算方法を見いだそうと粘り強く考え，文字式の意味や役割を問題解決に生かそうとしている。
C	図形の構成要素に着目することができず，規制線の図形を表現することができない。また，数量を捉えることができず式に表せない。	具体的な例では規制線の長さを求めることができるが，他の例では説明できない，あるいは具体的な例でも説明できない。	文字の役割やよさを理解できておらず，具体的な例の説明で終えている。

どのような課題解決の様態がよいと判断できるのか，ルーブリックで示す。

資料２　学習指導案（数学科　一部抜粋）



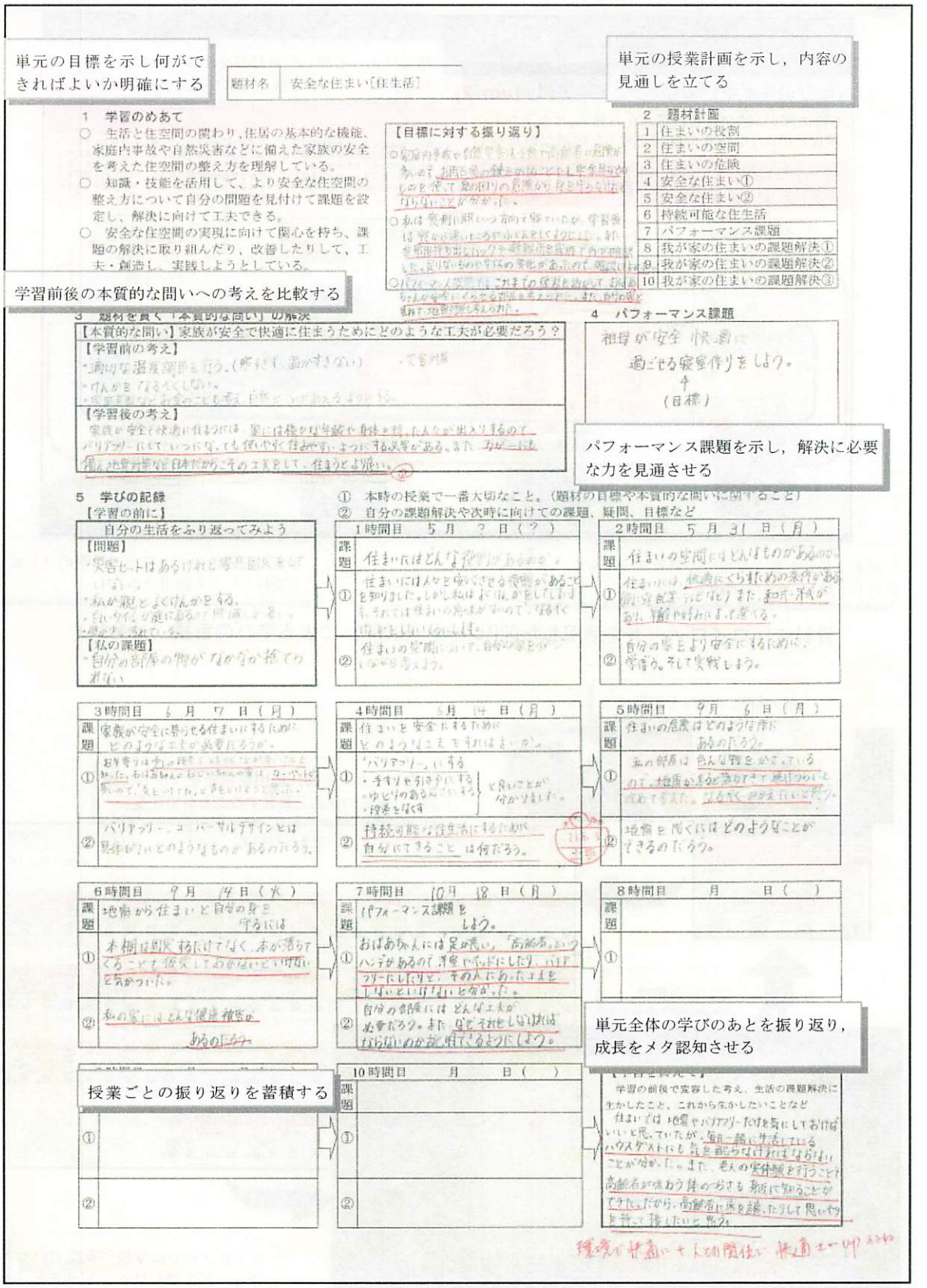
資料３　パフォーマンス課題生徒作品（数学科）

今年度は，それに加えて，生徒が自らの学びを把握し，修正・改善していく評価について，学習指導要領の主旨に基づいた評価の研修を行い，**OPPA**（One Page Portfolio Assessment）を取り入れた評価について全校体制で取り組んだ。OPPAとは，「教師のねらいとする授業の成果を，学習者が1枚の用紙の中に学習前・中・後の学習履歴を記録し，その全体を学習者自身に自己評価させる方法」である（堀哲夫　2019）。具体的には，次の２点をねらって単元ごとにOPPシートを作成した。

○　授業のまとまりにおいて単元の目標や本質的な問いに対する自分の考えや理解度，この後の学習に対する学びの調整について記述してメタ認知させる

○　それらの学習履歴を単元の最後に大きく振り返り，目標や本質的な問いについて自らの学びを照らし合わせることで，主体的に学習に取り組む態度の評価の手がかりにする

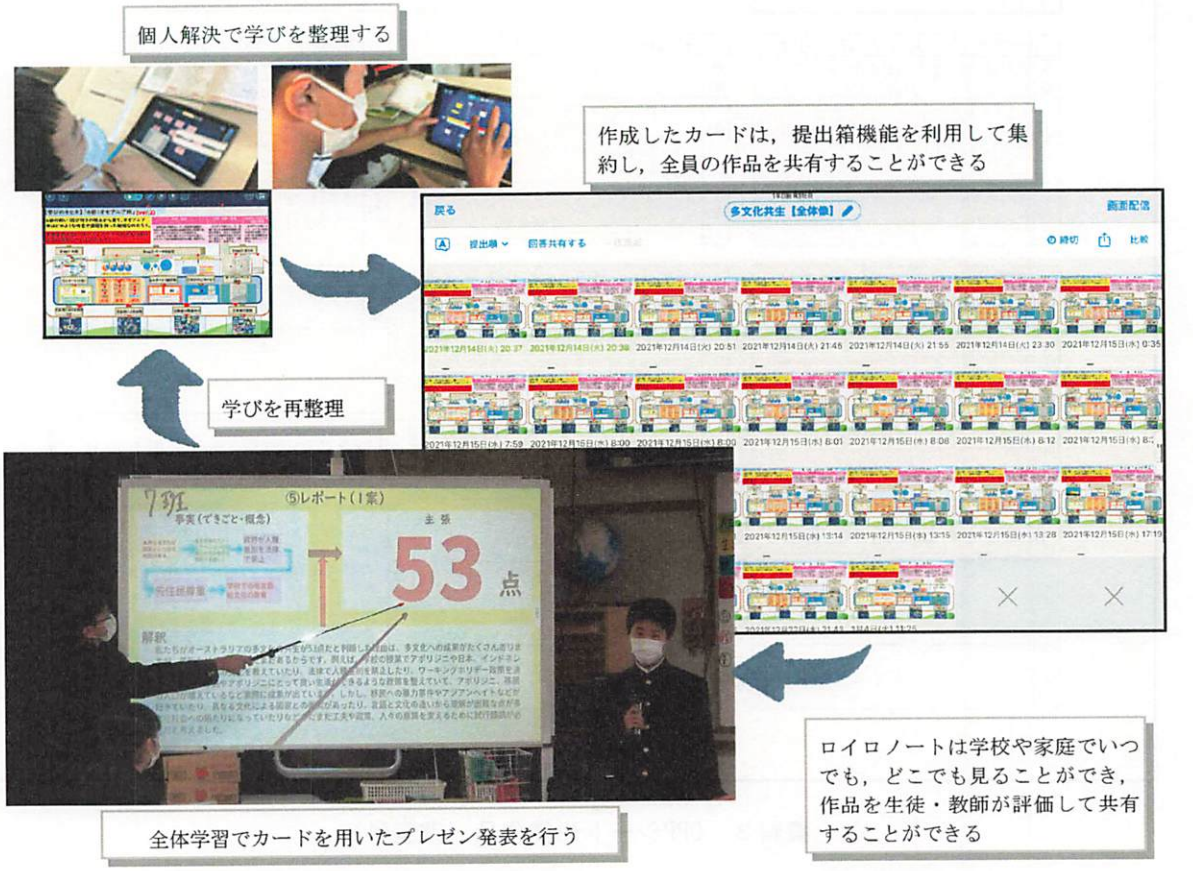
このOPPシートには，教科の目標や本質的な問い，学習計画，パフォーマンス課題等を盛り込み，生徒が単元の学びを目的や見通しを持ちつつ，自らの学びを把握しながら進めることができるようにした。また，これらのパフォーマンス評価作品やOPPシートについては，その作品の蓄積や共有・評価をICTを活用して行うとともに，適時教師から評価をフィードバックさせることで，生徒が成長を実感するとともに，以降の学習に対する学びを調整していくことができるようにした。特に，ICTの活用に関しては，教育支援ソフト「**ロイロノート・スクール**」（以下**ロイロノート**）を各教科積極的に活用し，個人や集団における課題解決や評価を効果的に進めた。



資料３　OPPシート生徒作品（家庭科）



資料４　ロイロノートを活用したOPPシート（LOPP）による学びの蓄積（社会科）



資料５　ロイロノートを活用した学びの共有と活用例（社会科）

5　研究計画と研究体制

(1)　研究計画（長期）について

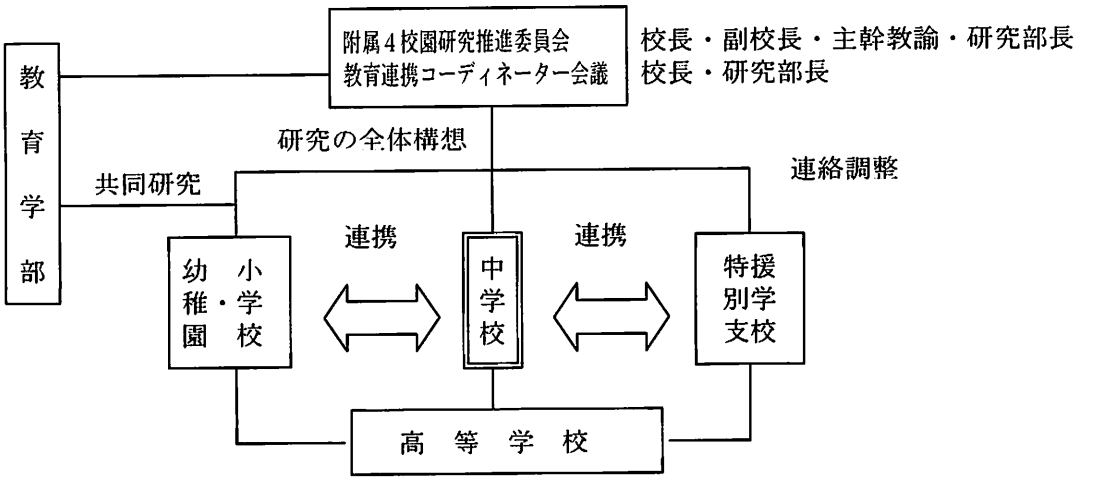
研究年次	研　　究　　内　　容
１年次	○教科横断的な学習の視点から，各教科等が連携して実践につながる資質・能力を育む教育課程を検討する ○各教員が，研究主題のもと研究テーマを設定し研究・実践を行う。一つの研究に対して，教育学部大学教員１名以上と共同研究を進める。 ○各教科等の目標や内容と実践者の育成との関係を明確にした各教科の指導計画を検討する。 ○既有の知識や経験を基にした話合いを推進するとともに各教科等においてその手法を活用した効果的な学習指導方法を開発する。 ○学校全体及び各教科領域において，実践につながる資質・能力の育ちを見取る評価内容や方法（パフォーマンス評価等）を検討する。
２年次	○１年次の研究の成果と課題を集約し，学校全体としての研究の焦点化を図る。これを基に，研究主題を具現化する研究実践の深化を図る。 ○既有の知識や経験を基にした話合い，及び，その手法を活用した学習指導を充実させる。 ○学校全体及び各教科領域において，主体的な学びにつながる評価方法（パフォーマンス評価・OPPA等）を検討する。
３年次	○２年次の研究成果と課題を基に，さらに研究の深化・統合を図る。 ○学校の研究主題に対する研究の評価を行う。

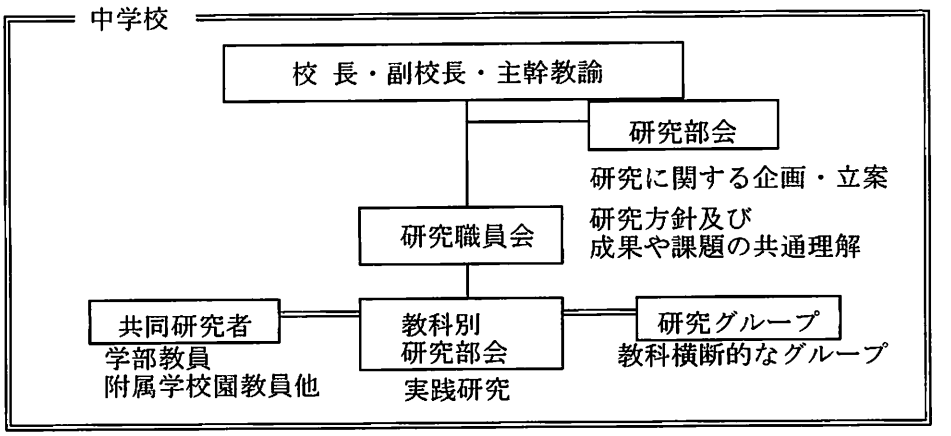
(2)　研究計画（今年度）について

時　期	研　　究　　内　　容	サイクル
４月～ ６月	・目標とする生徒の姿の設定と，研究テーマ（各領域及び個人）の設定 ・研究計画書の作成 ・生徒の実態把握（各個人または各教科領域にて） ・指導方法や評価方法の検討（パフォーマンス課題やルーブリック，OPPシート等の検討） ・言語技術教育の推進（継続して実施）	Ｐｌａｎ Ｄｏ
６～ 12月	・年次研究授業および研究協議の実施 ※研究グループ単位での授業研究	Ｄｏ
６・７月	・パフォーマンス課題やルーブリックについての研修会 ・OPPシートによる評価についての研修会	Ｄｏ
９～ 12月	・生徒の実態把握（各個人または各教科領域にて）	Ｃｈｅｃｋ
１・２月 ２月４日 ～３月	・学校全体での成果と課題の検証 ・第100回　愛媛教育研究大会（中学校の部） ・検証改善サイクルを活用したアンケートによる育ちの検証	Ｃｈｅｃｋ Ｄｏ Ｃｈｅｃｋ Ａｃｔｉｏｎ Ｐｌａｎ

(3) 研究体制について

各教科を基盤として各個人が研究・実践を進めていくに当たっては，本附属校園や大学教員等との共同研究を進めることにより，研究実践の客観性を高め，質の向上を図った。さらに，校内での教科横断的な研究グループを組織し，全教員が研究主題等への共通理解を図りながら研究ができる体制を整えた。





（参考文献）

- 西岡加名恵（2008）「『逆向き設計』で確かな学力を保障する」明治図書
- 鶴田清司・河野順子（2014）「論理的思考力・表現力を育てる言語活動のデザイン　中学校編」明治図書
- 田村学（2018）「深い学び」東洋館出版社
- 田村学（2021）「学習評価」東洋出版社
- 堀哲夫（2019）「新訂一枚ポートフォリオ評価OPPA　一枚の用紙の可能性」東洋館出版社
- 愛媛大学教育学部附属中学校（2019）研究紀要第71号